

ロマン派の理想主義とそのゆく方

—— シェリーの場合 ——

(その2)

笠原 順路

第三章 『ヘラス』

後期のシェリーは、有限なものなかに永遠の似姿を求めるといふ方向に進んでいったように思われる——拙稿(その1)の序章で私はこう述べた。つとにこの方向性を指摘したのは、マクガンであった。⁽¹⁾しかしマクガンの論旨も、後のシェリー研究家によって十分に理解され、かつ受け継がれていったとは言い難い。マクガンは、『ヘラス』最後のコーラスに着目し、「彼〔シェリー〕は、この結末部の六行において、『ヘラス』全体を覆し、否定してしまっている」と述べている。⁽²⁾シェリー晩年の理想主義のゆく方を、『エピサイキディオン』、『アドネーイス』、『生の勝利』とたどっていく時、ぜひ念頭においておかなければならないのが『ヘラス』という作品である。『アドネーイス』から『生の勝利』へのあの唐突な変化を解明する鍵がこの『ヘラス』にあるような気がするからである。その鍵とは、マクガンの言うように、単に ll. 1096-1101 の部分だけにあるのではない。その他、随所に晩年のシェリーを特徴づける手がかりを見出すことができる。

ギリシアを抑圧していたトルコの勢力が没落していくさまを謳いあげた詩劇、それが『ヘラス』である。執筆は1821年10月。その前書きにある通り、この作品は、シェリーが、トルコに抑圧されていたギリシア人民に対して抱いていた共感の情より、即興的に書いたものであり、ために、思想的には統一を欠く箇所も見うけられるものの、かえって、時のシェリーの問題意識が、矛盾はそのまま矛盾として、すなおな形で表明されたものといえる。本章では、シェリーの理想がどのような変貌をとげていったかという観点から、『生の勝利』との共通点を中心に考えていきたい。

Swift as the radiant shapes of sleep 225

From one whose dreams are Paradise
Fly, when the fond wretch wakes to weep,
And Day peers forth with her blank eyes;
So fleet, so faint, so fair,
The Powers of earth and air 230
Fled from the folding-star of Bethlehem:
Apollo, Pan, and Love,
And even Olympian Jove
Grew weak, for killing Truth had glared
on them;
Our hills and seas and streams, 235
Dispeopled of their dreams,
Their waters turned to blood, their dew to
tears,
Wailed for the golden years.
(225-38)

これは、“Worlds on worlds are rolling ever”で始まるコーラスを締めくくる第三聯である。ここでは、「眠りに宿る輝かしき形」(225)という非永遠性の象徴が、永遠性を表わす「日」(228)にとってかわられ、次に非永遠性の代表である「地および空の守護神たち」(230)が永遠性を代弁する「ベツレヘムの夕星〔=金星〕」(231)から逃げ去っていき、最後にやはり非永遠性を表わす「アポロ、パンそして愛」(232)そして「オリンポスのジョーヴ神」(233)までもが「真実」(234)という永遠性の象徴のもとに力を失っていくという構図が浮び上ってくる。『アドネーイス』第五十二聯と同じく、永遠性が非永遠性に勝つという枠組である。⁽³⁾しかし、ただそれだけではない。作者の心は、永遠性と対立する非永遠性の方にも同じように強く傾いている。この点でも、第一章で論じた『アドネーイス』第五十二聯と通ずる。いや、非永遠性を指向する力は『アドネーイス』の場合よりはるかに強い。そもそも「輝かしき形」とは楽園の夢における形

であり、その楽園を破壊する「真実 (Truth)」には“killing”という形容詞が冠せられている。しかも、結末部の四行では、「山、海、川」(235)が、その楽園の夢が失なわれたことを嘆いている。すなわち、この聯には、楽園の夢を失った者の喪失感も同時に表わされているのである。

シェリーはこのコーラスに自ら註をほどこし、次のように述べている。

The concluding verses indicate a progressive state of more or less exalted existence, according to the degree of perfection which every distinct intelligence may have attained. ... That there is a true solution of the riddle, and that in our present state that solution is unattainable by us, are propositions which may be regarded as equally certain

思えば、歴史は進歩し理想状態に向いつつあるという考え方は、若きシェリーが『マブ女王』第八・九篇のなかで声高にうたいあげた理想主義であり、さらには十八世紀後半の前期ロマン派詩人たちがフランス革命のなかに見た至福千年の思想でもあった。しかし、ここに至ってシェリーは、かつての理想主義の限界を認識し、それを自註の形で表明するところまで来た。現実の人間存在を越えたところの、より完成された理想を追い求めるために支払わねばならない代償の大きさに気づきだしていたのである。永遠性が非永遠性に打ち勝つという構図の上に、楽園の夢を失った者の喪失感も重ね合わせねばならなかったシェリーのジレンマは、ロマン派の理想主義のゆく方を示唆していると言えよう。

未来の完全性に対する信仰がゆらいだシェリーは、いきおい懐疑的になる。ll. 738-806 でアハジュイーラスがマームードに語る言葉のうちには、理想主義が挫折して懐疑主義に向い、さらにその懐疑主義が唯我論にまで発展していったシェリーの苦悩のあとがうかがえる。

But look on that which cannot change — the
One,
The unborn and the undying. Earth and
ocean, 769
Space, and the isles of life or light that gem
The sapphire floods of interstellar air,
This firmament pavilioned upon chaos,
With all its cressets of immortal fire,

Whose outwall, bastioned impregably
Against the escape of boldest thoughts,
repels them 775
As Calpe the Atlantic clouds — this Whole
Of suns, and worlds, and men, and beasts,
and flowers,
With all the silent or tempestuous workings
By which they have been, are, or cease to be,
Is but a vision ; 780

(768-80)

すでに第一章で述べたことだが、初めの二行 (768-69) で生死を超越した不変なる「一」に目を向けよと述べておきながら、つづく十一行 (769-79) で地上から見た細密な描写をえんえんとな行っているというバランス感覚の欠如は、シェリー自身、意識するとしないにもかかわらず、「一」でない「多」の方に強く引かれていたことに起因するように思われる。ちなみに、ll. 769-79 の部分は、後につづく“Is but a vision”の主部を構成している。もうここでは、絶対永遠なる「一」の価値と、「単なる幻」であるはずのものの価値は逆転しかねないところまできている。そのうえ、この一節には奇妙な比喻が用いられている。ジブラルタル海峡に聳え立つカルプ山によって大西洋の雲が地中海に流れ込むのを妨げられているのとちょうど同じように、いかに力強い思想といえども、この現象界を被っている堅固な蒼穹を打ち破ることはできないとされている (774-76)。それでは「一」なるものなど求めることはできないはずであるにもかかわらず。これは、とりもなおさず、「一」なるものを求めていこうとする理想主義がその内部から崩壊を始めたことに他ならない。

アハジュイーラスはさらにこう続ける。

Ahasuerus. Mistake me not! All is contained in each.

Dodona's forest to an acorn's cup
Is that which has been, or will be, to that
Which is — the absent to the present. 795
(792-95)

ここでは、ドドナの森のどんぐりの皿に対する関係、過去または未来の現在に対する関係、不在の實在に対する関係、この三つの関係が並置されている。實在するのは現在だけで、未来も過去も実体をもたないという認識がこの等式から導き出される。これは、未来の価値も過去

の価値も否定し、現在の価値のみを是認するという考え方と言いかえてもよい。次章で述べることだが、物理的な時間の流れを、全て「今」という平盤な時の相に還元してしまう『生の勝利』におけるあの入れ子式構造を可能にしているのは、『ヘラス』のこの詩行に表わされているような、過去・未来よりも高い価値を与えられた「現在」という認識である。言葉をかえて言うなら、それは、「現在」という個は全を包含するのだ(“All is contained in each.”)という現実讃美の考え方なのである。

では、その「現在」とはどのようなものか。

Thought 795

Alone, and its quick elements, Will, Passion,
Reason, Imagination, cannot die ;
They are, what that which they regard ap-
pears,
The stuff whence mutability can weave
All that it hath dominion o'er, worlds,
worms, 800
Empires, and superstitions. (4)
(795-801)

難解な箇所だが、ここでの論旨はおおむね次のようになる。思考があるから、我々の目にしているものが、そのように見え、思考から、さまざまな世界、取るに足りない虫けら、さまざまな国家や迷信などの現象界の諸相が生ずる。ここにおけるシェリーの懐疑論は、もう、ほとんど唯我論と境を接するところまできている。そもそも、ll. 792-801の詩行は、直前にアハジュイーラスが述べたこと(780-85)の言い直しとして語られたものであった。それは次のようなものである。

— all that it inherits 780

Are motes of a sick eye, bubbles and dreams;
Thought is its cradle and its grave, nor less
The Future and the Past are idle shadows
Of thought's eternal flight — they have no
being :
Nought is but that which feels itself to be. 785
(780-85)

1. 780の“it”とは、先に引用したll. 769-80の主部すなわちll. 769-79のことで、地上から見た現象界の諸相をさす。ここでの主張は、基本においてll. 792-801と同じである。ただ最後の一文「その存在に触れて感じと

れるもの以外には何も存在しない」は、完全に懐疑論の表明となっている。

そもそもシェリーには、懐疑論と理想主義のジレンマが存在していた。

I confess that I am one of those who am unable to refuse my assent to the conclusions of those philosophers who assert that nothing exists but as it is perceived.

It is a decision against which all our persuasions struggle, and we must be long convicted before we can be convinced that the solid universe of external things is “such stuff as dreams are made of.” The shocking absurdities of the popular philosophy of mind and matter, its fatal consequences in morals, and their violent dogmatism concerning the source of all things, had early conducted me to materialism. This materialism is a seducing system to young and superficial minds. It allows its disciples to talk, and dispenses them from thinking. But I was discontented with such a view of things as it afforded; man is a being of high aspirations, “looking both before and after,” whose “thoughts wander through eternity,” disclaiming alliance with transience and decay; incapable of imagining to himself annihilation; existing but in the future and the past; being, not what he is, but what he has been and shall be.

(Julian ed., VI, p.194)

All things exist as they are perceived ; at least in relation to the percipient. “The mind is its own place, and of itself can make a Heaven of Hell, a Hell of Heaven.” But poetry defeats the curse which binds us to be subjected to the accident of surrounding impressions. And whether it spreads its own figured curtain, or withdraws life's dark veil from before the scene of things, it equally creates for us a being within our being. It makes us the inhabitants of a world to which the familiar world is a chaos. It reproduces the common Universe of which we are portions and per-

cupients, and it purges from our inward sight the film of familiarity which obscures from us the wonder of our being. It compels us to feel that which we perceive, and to imagine that which we know. It creates anew the universe, after it has been annihilated in our minds by the recurrence of impressions blunted by reiteration. It justifies that bold and true word of Tasso: *Non merita nome di creatore, se non Iddio ed il Poeta.*

(Julian ed., VII, pp.137-38)

初めの引用は、1819年後半に書かれたとされる『生について』からのものである。ここにおけるシェリーは、存在は知覚なりというイギリス経験論の流れをくむ「唯物主義」に強く引かれながらも、人間とは崇高な憧れを抱く存在で、未来や過去にその憧れを向けるものであるという理想を抱いていた。後の引用は『詩の辯護』のなかでも人口に膾炙した箇所である。ここでもやはりシェリーは、存在は知覚なりという世界観を前提として認めながらも、感覚によって形づくられる世界のなかだけに安住しようとしているわけではない。シェリーは、その世界の呪いをうち破るものとして詩の効用を主張しているのである。⁵⁾ この二つの例に明らかなように、シェリーは、懐疑論的世界のなかに住む人間の救いを、過去、未来および詩のなかに求めようとしていた。

しかし『ヘラス』にはその救いがなくなってしまっている。アハジュイーラスの語る言葉は、シェリーのそれまでの理想および理想追求の方法を否定しているのである。

では、それを否定したあとどうなるのか。アハジュイーラスに関し、シェリーは自註をほどこし、次のように述べている。

I have preferred to represent the Jew as disclaiming all pretension, or even belief, in supernatural agency, and as tempting Mahmud to that state of mind in which ideas may be supposed to assume the force of sensations through the confusion of thought with the objects of thought, and the excess of passion animating the creations of imagination.

この自註と、II. 762-806 とを考え合わせても、そこから理路整然とした思想体系が生じてこないことは否めない。これも、先に私が述べた、理論的に統一を欠く箇所

の一つである。しかし、少なくとも次のことは言える。観念の世界と感覚の世界が分裂していて、前者には感覚というものの持っている強烈さが欠けているという認識がなければ、またさらに、想像力から生れたものに息を吹き込むのが感情の過剰であるという認識がなければ、上記のような発言は生じてこないはずである。もはや観念はそれ自体では「力」を失ない、想像力から生れたものもそれ自体では真の生命がなくなってしまっている。それらを本当に生かすためには、「感覚の強烈さ」や「感情の過剰」が必要不可欠となってくるのである。未来、過去または「一」なるものに救いを求めていた態度と比べると、これは非常に現実肯定的な姿勢であると言わざるを得ない。すなわち、過去も否定し、未来も否定し、「一」なるものも否定したシェリーが向いつつあったのは、現実のなかで触知できる感覚の世界なのである。

この変化を一言でいえば、理想から現実へと意識が向かっていった、ということになるのだが、私が問題としたのは、単に結果として、理想を追い求めていた目が現実というものの重みに気づくようになったということだけではなく、いかにしてその変化が起っていったかという過程であり、さらに言えば、その変化のロマン派的特質、シェリー的特質である。

ロマン主義芸術の一つの特徴、しかもかなり本質的な特徴の一つに、現実の対極に位置する非現実の中に一種の真実を認めていこうとする姿勢をあげることができる。そして、非現実のなかに求めた真実とは、しばしば、楽園としての形をとる。歴史の始原に黄金時代を指定するのもその一例であるし、その反対に、歴史のゆきつく先に黙示を求めるのもその一例である。または、夢という非現実のなかに楽園を見出だすこともある。そして、いずれの場合も、その非現実の楽園は、何らかのかたちで現実を変え得る力をそなえている。現実と切り離されたところに楽園があるのではない。現実に対して強く働きかけてくる非現実世界からの力、これがロマン主義芸術をつき動かしているエネルギーである。

その意味で、「夢」というのは、ロマン派文学においてとりわけ重要な意味をもつ。そのマニフェストともいえるべきものは、キーツの言った「アダムの夢」であろう。⁶⁾ アダムが夢に見たイヴの姿が、目覚めると現実のものとなっていたという、ミルトン、『失楽園』第八巻のエピソードには、夢の真実性が表明されているからである。

しかし、夢で語られる真実というものが、常に当事者にとって楽園を構成しているとは限らない。『ドン・ジュアン』のハイディ・エピソード結末部でハイディが見る夢 (IV, xxxi-xxxv) はその一例である。帰還したラ

ムブローが、愛の床に横たわっているジュアンとハイディを発見する直前、ハイディは不吉な夢を見る。彼女は冷たい洞窟にジュアンの死体を見つけるが、次第にその顔が父親ラムブローの顔にかわってゆき、はっとして目を覚すと、ラムブローがハイディの顔をのぞき込んでいるのであった。この場合、ハイディにとって、夢を見る前の状態が楽園なのであり、その楽園を破壊する苛酷な現実が彼女の夢のなかにまで侵入してきているのである。

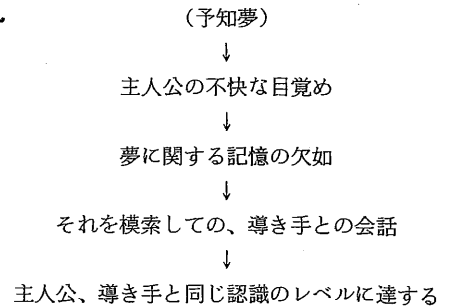
そして、もう一つの例が『ヘラス』である。大平の眠りを貪っているトルコ帝国の最高権力者マームードは、三たび悪夢にうなされ、目を覚ます。しかし彼にはその夢の記憶がない。以後、マームードはとり憑かれたように、その夢解きに固執する。彼はまず、予言者アハジュイーラスに己れの未来の運命をたずね、先に引用した忠言を引き出すと同時に、お前の求めている未来とは過去のうえに映し出されている、という予言を繰り返し聞かされる。次にマームードはモハメットの亡霊と言葉を交わすが、臣下の叫ぶ「勝利だ！勝利だ！」(912)という声とともに亡霊が消え去る。マームードは、キーツが『夜鶯への賦』最終行で発した言葉を受けて、“Do I wake and live?” (917)と自問し、つづけて、今までアハジュイーラスという導き手から聞かされてきた未来観を、今度は自分自身の信念として表明するに至る：

Come what may,
The Future must become the Past, and I
As they were to whom once this present hour,
This gloomy crag of time to which I cling,
Seemed an Elysian isle of peace and joy 927
Never to be attained. — I must rebuke
This drunkenness of triumph ere it die,
And dying, bring despair. Victory! poor
slaves! [Exit MAHMUD.

(923-30)

「未来は必然的に過去と同じになる」——マームードはこれまで三回にわたってアハジュイーラスからこう聞かされてきた。⁽⁷⁾ そして今、彼はそれを自分の口から語った。このセリフにおいてマームードはアハジュイーラスと同じ認識のレベルに達したと見てよい。そして、マームードが最後に吐く言葉、「勝利だと。かわいそうな奴隷たちよ！」は、『プロミシユース解縛』第一幕で、プロミシユースが圧制者ジュピターに示した憐憫の情(I, 53)を思いおこさせる。

さて、以上を図式化すると次のようになる。



「予知夢」を()でくくったのは、夢そのものの描写が作品には表われないからである。また私は、この図式で夢とそれに関した構造のみを示したのであって、II. 527-638に長々と語られる使者たちの戦況報告や、随所にみられるコーラスは意図的に省略した。こう考えてくると、このパターンは、『生の勝利』における作品の枠組とも付合するし、多少の修正を加えれば、キーツの『ハイピアリヤンの没落』の構造にも近いことがわかる。『生の勝利』における導き手とはもちろんルソーであり、『ハイピアリヤンの没落』のそれはモネタである。またいずれの作品でも、主人公は最後に導き手と同じ認識のレベルに達している。この点についての詳説は次章にゆずるとしても、先に述べた『ドン・ジュアン』、そして『生の勝利』、『ハイピアリヤンの没落』という後期ロマン派を代表する三詩人が遺した未完の問題作においては、その夢というものが、たとえそれが真実であるとしても、いわゆる楽園としての夢ではなく、苛酷な現実がその中に入り込んだ夢であるということの意味はきわめて重要である。ロマン派的理想の顕現としての夢が、現実意識の侵入に晒されているからである。

『ヘラス』にもどらう。マームードが最後のセリフの最後の言葉「かわいそうな奴隷たちよ」で示した被抑圧民に対する憐憫の情が、『プロミシユース解縛』でプロミシユースがジュピターに対して抱いた憐憫の情と同種のものであると先に述べたが、実は前後関係を考えると、この二つは、決定的に異なる面も持っている。『プロミシユース解縛』では、プロミシユースが憐憫の情を示すことで彼自身の縛めが解け、世界がジュピターの圧制から解放されていくのであるが、『ヘラス』では、それほど楽観的な展望が開けてくるわけではない。いやむしろ、かなり悲観的な未来観が以後三箇所に顔をのぞかせることになるのである。

その第一は、I. 912以後四回にわたって繰り返される「勝利だ！」という歓声にある。⁽⁸⁾ すなわち、時の流れの

必然としてトルコ側が勝利をおさめるのであれば、マームードの示した憐憫の情は全くのむだに終わってしまうことになるからである。これは、何ら明るい未来を約束することのない憐憫の情である。しかし、そしてこの「しかし」は重要な「しかし」なのだが、よく考えてみると、繰り返し叫ばれるトルコ側の勝利というのは果して事実なのだろうか。われわれは、II. 527-638 において、かわるがわる舞台上に登場した四人の使者によってトルコ側の劣勢がこと細かに報告されていたのを憶えている。では、あれからほんのわずかの間に形勢が逆転したのだろうか。いかにも、ありそうにないことである。ことによると、偽りの戦況報告が臣下のもとになされ、それを事実と解した臣下がひとり喜んでいるだけではないのか。もしくは、臣下がマームードを欺かんがために、故意に偽りの歓声をあげているだけかもしれない。さらに、想像をたくましくすると、〈外の声〉とはマームードの空耳で、実際にそのような声をあげている者などいないのかもしれない。作品としては一応、「勝利だ！」という現実世界からの声でマホメットの亡霊が消え去っていくという構造にはなっているものの、はたして、真実は、現実世界に属する〈外の声〉にあるのか、それとも非現実世界に属する亡霊の言葉のうちにあるのか、決し難くなってくる。キーツは『夜鶯の賦』で、感覚美の極致に由来する「安らかな死」の世界に真実があるのか、「皇帝や道化」、ルツや幽閉された美女の世界に真実があるのか、それとも、「forlorn」という言葉によって自我意識が復活した詩人自身の属する世界に真実があるのか、その煩悶の末に“Do I wake or sleep?”という言葉を発して作品を結んだ。それをふまえて“Do I wake and live?”と自問したマームードのジレンマは、キーツのジレンマと同様に、現実と非現実の相方の価値を等しく認めたロマン派のジレンマである。そしてシェリーの場合、その現実意識は、それがおぞましいトルコの勝利によって引き起こされているだけになおさらのこと悲観性を帯びてくるのである。

マームード最後のセリフの後につづく第二の悲観的箇所は II. 973-87 にある。

Semichorus I.

Alas! for Liberty!
If numbers, wealth, or unfulfilling years,
Or fate, can quell the free! 975
Alas! for Virtue, when
Torments, or contumely, or the sneers
Of erring judging men

Can break the heart where it abides.
Alas! if Love, whose smile makes this obscure
world splendid, 980
Can change with its false times and tides,
Like hope and terror, —
Alas for Love!
And Truth, who wanderest lone and
unbefriended,
If thou canst veil thy lie-consuming mirror 985
Before the dazzled eyes of Error,
Alas for thee! Image of the Above.
(973-87)

このセミコーラスが〈外の声〉の「殺せ、奪え、焼き払え／＼一人も残さずに」に続くものであることを考えれば、このような悲観的発言が生じるのも当然のことといえる。ただここで特筆すべきことは、「自由」、「徳」、「愛」、「真実」という諸要素——現実社会を未来の完全性に導く鍵になるであろうその諸要素のもつ否定的側面に気づき、それらの空しさを嘆いているということである。このセミコーラスを作品初めの別のコーラスと比べてみると、その悲観性が一層はっきりと浮び上ってくる。

Semichorus I.

Life may change, but it may fly not;
Hope may vanish, but can die not; 95
Truth be veiled, but still it burneth;
Love repulsed, — but it returneth!

Semichorus II.

Yet were life a charnel where
Hope lay coffined with Despair;
Yet were truth a sacred lie, 40
Love were lust —

Semichorus I.

If Liberty
Lent not life its soul of light,
Hope its iris of delight,
Truth its prophet's robe to wear,
Love its power to give and bear. 45
(34-45)

こちらのセミコーラスの掛け合いは、基本的にいって、「いのち」、「希望」、「真実」、「愛」の肯定的側面を讃

美したものであると言ってよい。確かに、それら諸要素の否定的側面をもセミコーラスⅡ(38-41)が提示し、どうした場合にそうなるのかという条件をセミコーラスⅠ(41-45)が続けて述べてはいるが、それは仮定法により表現されていて、現実にはあり得ないはずの単なる仮定として述べられているにすぎない。全体として、未来の完全性に対する確信がその根底にあることに変わりはない。先のⅡ. 973-87が直接法による仮定表現となっていたのと対照的である。もう一つ別の比較を試みてみよう。『プロミシュース解縛』第一幕で、プロミシュースをなぐさめに来た<第一の精>はこう語る。

First Spirit.

On a battle-trumpet's blast
I fled hither, fast, fast, fast, 695
'Mid the darkness upward cast.
From the dust of creeds outworn,
From the tyrant's banner torn,
Gathering 'round me, onward borne,
There was mingled many a cry — 700
Freedom! Hope! Death! Victory!
Till they faded through the sky;
And one sound, above, around,
One sound beneath, around, above,
Was moving; 'twas the soul of Love; 705
'Twas the hope, the prophecy,
Which begins and ends in thee.

(I, 694-707)

すでにナポレオン戦争で荒廃したヨーロッパから「自由」、「希望」、「死」(これは圧制者の死であろう)、「勝利」という「信条」(697)は消え去ってしまった。しかし、そのなかにあって、ただ一つ「愛」という信条だけは未だに価値を失っていない。この詩行は『プロミシュース解縛』執筆当時のシェリーの理想的展望を物語って余りある。しかし、『ヘラス』、Ⅱ. 973-87からはその「愛」という信条さえも姿を消したのである。

こうした悲観的なトーンのうち、しかし同時に現実社会の抜き差しならない真実をも見据えながら、作品は結末部のコーラスへと向っていく。

Chorus.

The world's great age begins anew, 1060
The golden years return,
The earth doth like a snake renew

Her winter weeds outworn :
Heaven smiles, and faiths and empires
gleam,

Like wrecks of a dissolving dream. 1065

A brighter Hellas rears its mountains
From waves serener far ;

A new Peneus rolls his fountains
Against the morning star.

Where fairer Tempes bloom, there sleep 1070
Young Cyclads on a sunnier deep.

A loftier Argo cleaves the main,
Fraught with a later prize ;

Another Orpheus sings again,
And loves, and weeps, and dies. 1075

A new Ulysses leaves once more
Calypso for his native shore.

Oh, write no more the tale of Troy,
If earth Death's scroll must be!

Nor mix with Laian rage the joy 1080
Which dawns upon the free :

Although a subtler Sphinx renew
Riddles of death Thebes never knew.

Another Athens shall arise,

And to remoter time 1085
Bequeath, like sunset to the skies,

The splendour of its prime ;
And leave, if nought so bright may live,
All earth can take or Heaven can give.

Saturn and Love their long repose 1090

Shall burst, more bright and good
Than all who fell, than One who rose,
Than many unsubdued :

Not gold, not blood, their altar dowers,
But votive tears and symbol flowers. 1095

Oh, cease! must hate and death return?

Cease! must men kill and die?
Cease! drain not to its dregs the urn
Of bitter prophecy.

The world is weary of the past, 1100

Oh, might it die or rest at last!

(1060-1101)

冒頭二行に示されているとおり、このコーラスは、過去の黄金時代の復活にともなう喜びを歌ったものである。しかし全七聯のうち二つの聯には、過去が甦るのにもなつて、その過去が内包していた悪もが復活することへの恐れが表明されている。言うまでもなくそれは第四聯(1078-83)と最終聯(1096-1101)である。「かの苦き予言の酒壺」(1098-99)とは、アハジュイーラスの予言のことであるが、とりわけ、三回にわたって繰り返された「未来は必然的に過去と同じになる」という言葉を指しているものと考えられる。この予言の酒を飲みほさんとするれば、いやがうえにも「^お澱」(1098)まで飲まねばならない。未来において過去の黄金時代が再来するとすれば、黄金時代がその内に孕んでいた諸悪までもが甦ることになる。これが最後の、そして最も決定的な悲観的展望である。

この箇所では『ヘラス』の「首を締めている」——とは、A. M. D. ヒューズの言葉である。⁽⁹⁾ もしシェリーが、いわゆるシェリー流のプロメテウス神話——プロミシュースがジュピターに対して憐憫の情を示すことで縛めが解け、世界が至福の状態へと変わりゆくという神話——を終始一貫して堅持していたとするなら、確かにシェリーもここで己の理想主義の首を締めていることになるのかもしれない。しかしすでに述べたように、l. 930 でマームードがギリシア人民に対して示した憐憫の情以後のコーラスには、『プロミシュース解縛』の場合とは明らかに異なる悲観の色あいが混ぜ合わされている。ここにおいてシェリーは、それまでのプロメテウス神話を修正しようとしているのである。

米 米 米

筆者が拙稿(その1)のなかで論じたことは、主としてシェリーがネオプラトニックな「一」なるものを求めていこうとする理想主義をどのように否定し修正していったかということであった。そして、(その2)においては、未来および過去に対する信仰の崩れゆくさまを主に述べた。「一」なるものを否定し、未来を否定し、過去を否定したシェリーにとって、残されているのは「現在」だけである。『ヘラス』最終行でシェリーが望んでいたのは、この世が消滅してしまうこと、さもなければ、永遠に停滞してしまうことのいずれかであった。彼は後者をとった。過去も未来も「一」なるものも存在しない世界、

「現在」という時の相が永遠に続いていく世界、それが『ヘラス』から約半年後に書かれた未完の大作『生の勝利』の中で展開することになるのだが、この点については、第四章に

— つづく。

註

- (1) Jerome J. MCGANN, "The Secrets of an Elder Day: Shelley After Hellas", *Keats-Shelley Journal*, Vol. XV (1966), pp.25-41. See for example, p.25: ... the poetry of 1822, in the very act of denying the myth of Absolute Beauty, found a way of reconciling itself to mortality.
- (2) MCGANN, p.26.
- (3) 拙稿、第一章を参照。
- (4) 難解な箇所なので語釈をほどこす。l. 796 の its は thought を受け、its quick elements と Will, Passion, Reason, Imagination が同格。以下 are の補語は what ... appears までと、The stuff ... superstitions の2つ。l. 799 の it は mutability のこと。All that ... o'er の部分は次の worlds ... superstitions と同格。
- (5) このように、シェリーの理想主義が、ロック以後のイギリス経験論哲学の現実認識をその基盤に据えているということは、彼の理想主義が文字通りロマン派の理想主義であることの証しであり、さらに言えば、二十世紀の問題意識と本質においてつながるものでもある。
- (6) 1817年11月22日付、ベンジャミン・ベイリー宛書翰。
- (7) Cf. ll. 805-06, 841-42, 852-54.
- (8) Cf. ll. 912, 948-51, 967-72, 1016-22.
- (9) A. M. D. HUGHES, *The Nascent Mind of Shelley* (Oxford U. Pr., 1947), p.254.